

田上（たなかみ）の地域資源と新しい街づくりへの考察

片岡 太慶定（社会人コース）

1. はじめに

私が住む大津市田上は大津市最南東端部にあり周囲は湖南アルプスと瀬田丘陵の山に囲まれその中心部を大戸川が縦断し豊かな水田地帯となっている。今回のテーマ考察で、現在の田上が戦後の時期にどのように変化してきたかを見るために戦後昭和期から今日に至る田上の人口・世帯や農家・耕地面積の変遷などを見てみると、人口は昭和 45 年以来増加を続けており大津市の中でも比率が増加している。山林や田畑が住宅街になり人口増加はあったものの環境の変化が大きく進んだ半世紀であったといえる。

2. たなかみ里山クラブの実践から

おおつ環境フォーラム・たなかみ里山クラブなどの活動拠点として山林資源の有効活用と「次代を担う子どもが主役」をテーマに幼児と小学生らを対象に、四季を通しての森を舞台にした自然講座も開催してきた。活動範囲が点から線へ、そして地域に面として広がり最終的にそれがひとつの輪（円）になることを願っている。

3. 田上街づくりの現状調査と課題

大津市まちづくりビジョンでは「豊かな自然環境と地域資源を活かした田園のまちゾーンの形成」とあるが、地域に暮らす人たちの意見を知るため、3 学区の街づくり会議の代表メンバーだった方々にアンケートを行なった結果は、「大津市都市計画は現実味がない。新旧住民の交流促進のためには財産区などの制度改革必要。新しいことはこの地区の風土に馴染まない。交通の安全と利便性では、バス利用促進運動で増便と運賃値下げを図る。観光協会をつくり地域特産品販売や地域交流と情報発信できる場所が必要。大型トラックの迂回規制など」であった。問題点として、地域の活性化を他人任せにして、「山・川・郷が元気であれば人も元気」なのに生産と生活の場が豊かになることを忘れ、(資源の)消費経済に移行したことであった。

4. 新しい街づくりのアイデア提言

地域資源とは、人間が利用可能な領域全ての物的、人的、経済的資源を含むものとして捉えようと考え、それに持論の 21 世紀「か(環境)・き(教育)・く(食べ物)・け(健康福祉)・こ(高齢社会)& に(ニッチ)」構想とを組み合わせ、そこに生まれる相乗効果から最適化、効率化を考察しようとした。太陽と水を供給する田の神から転化したと言われる田上山の由来を踏まえて田上の新しい街づくりは、田上全体を里山として捉え、これからの 10 年を山・川・郷をセットで考え「農業」をキーワードとすることで自然循環社会を目指すこととする。

- ① 「(仮称)田上街づくり準備委員会」の立ち上げ運動。点から線へ、輪（円）への調査開始。
- ② 大学・学生・地域による「街づくりフォーラム（案）ひとの力の育成・連帯」の開催。
- ③ 長期展望でなく、得られる情報や制度の基にしっかりしたビジネス（活動）を実践して進めていく。

5. おわりに

片岡自身の立ち位置については、次のように考えている。この地域は新しいモノにはなかなか馴染まない風土風習があるので、まず新旧住民の交流する場を設けなければならない。「誰がやるか」では無く、「何ができるか」を考えることがポイントで自身は組織の歯車で例えるならば潤滑剤の存在でいたいと考えている。街づくりとは、決して物理的にモノを作るだけでなく、街を自分たちの手で作っているという意識を育てていくこと、そしてそれを実現するための近隣の人たちやコミュニティの相互関係を築いていくことも重要な課題である。